

S1 “日本海のクジラたち”の謎を探る

山田 格 (国立科学博物館)

Quest for the mysteries of cetaceans of the Sea of Japan.

Tadasu K. Yamada (National Science Museum)

1988 年の日本海セトロジー研究会発足以来, 日本海の鯨類に関する理解は著しく深まってきた。当初から会のテーマとなったオウギハクジラ (*Mesoplodon stejnegeri*) については, 福岡県から利尻島まで, ほぼ日本海全域の会員諸氏の絶大な助力の結果, 分布域, 繁殖状況をはじめ多くの知見が得られている (Yamada and Yamada, 1999)。

最近の大きな話題は, ヒゲクジラとしては 90 年ぶりというツノシマクジラ (*Balaenoptera omurai*) の発見が挙げられる (Wada, et al, 2003)。本種の発見については本日の和田氏の講演, あるいは明日の大石氏の講演で詳細について説明があると思われる。体長 10m をこえるクジラが, 21 世紀に至るまで人類にきちんと認知されていなかったこと, ニタリクジラとして認知されていたクジラが実は 2 種からなることなど, 鯨類に関する認知の問題ともからんで重要な成果であるといえよう。一方, かつてはある程度の個体数があったと考えられるコククジラ (*Eschrichtius robustus*) が, 少数ながら日本列島の日本海側を通っている可能性も明らかになりつつある (南部他, 2003)。

さらに, 能登島付近に定住しているかに見えるミナミハンドウイルカを思わせるイルカの群れの存在, しばしば本会でも話題になっている日本海の船舶航路とクジラ・イルカの干渉など日本海のクジラ・イルカに関する話題はつきない。そのような状況の中で, 日本海の中央部あるいは大陸側のクジラ・イルカに関する知見をいかに増していくのか, 日本海で人類とクジラ・イルカがどのように共存していけるのかなど, 本会の将来のテーマとして何を目指していくのかという点もこれからの課題であろう。

S2 ツノシマクジラ - 新たに記載されたナガスクジラ属鯨類 -

和田志郎 (中央水産研究所)

Tsunoshima kujira, *Balaenoptera omurai* - a newly described whale in the genus *Balaenoptera*.
Shiro Wada (National Research Institute of Fisheries Science)

1970 年代の後半にソロモン海とジャワ島の南で‘変わったニタリクジラ’が 8 頭、日本政府発給の南半球産ニタリクジラ特別許可の下で捕獲された。8 頭は、体長 9.6 - 11.5m で性的に成熟し、最小の雌を除く 7 頭が既に肉体的に成熟しており、ナガスクジラに似た外観、クロミンククジラに似たツートンカラーのヒゲ板、45 の酵素遺伝子座のうち 10 座で固有の遺伝子をもつなど、既知の鯨種には見られない形質の組み合わせを示していたが、骨格は採取されなかった。

この種不明鯨の分類学的帰属を確定するには未だに外部形態が不明な *B. edeni* の分類学的不確実性を解決することが先決となった。そこで、*B. edeni* のホロタイプと Junge (1950) の Pulau Sugi 標本を精査した結果、*B. edeni* の鼻骨周辺の形態は *B. brydei* と大きく異なることを新たに確認した。さらに、ミトコンドリア DNA 全調節領域の塩基配列も *B. edeni* と *B. brydei* の間の違いは *B. brydei* とイワシクジラの違いより大きく、また、種不明鯨と既知の同属種の違いはその 2 - 3 倍であった。以上の結果は学名 *B. edeni* に Bryde's whale の学名としての先取権を与えた Junge (1950) のシノニム化を否定し、*B. edeni* (仮称イーデンクジラ)、*B. brydei* (ニタリクジラ) および種不明鯨をそれぞれ独立の種とする見解を強く支持した。

1998 年 9 月に山口県豊北町角島で事故死した体長約 11m の雌クジラの遺骸を岩手県立博物館 (大石雅之) および国立科学博物館 (山田格) と共同で調査した結果、種不明鯨を新種と断定する決定的な証拠が得られた。すなわち、その外部形態と DNA はこのクジラが 8 頭の種不明鯨と同じ種に属することを示し、その完全骨格は種不明鯢が他のどの同属種とも異なるユニークな骨学的特徴を持つ新種であることを明瞭に示していた。

新種の学名は故大村秀雄博士に敬意を表して *B. omurai* (Wada, et al., 2003) とし、和名はホロタイプの産地に因んでツノシマクジラとした。しかし、*Balaenoptera* 属の分類には未解決の問題がまだ二つ残っている。一つは *B. edeni* の外部形態を明らかにすること、もう一つは *B. omurai* の標本数を増やしてより正確な標徴形質を確立することである。そのためには、将来の座礁鯢を注意深く調査することと、誤同定や未同定の博物館所蔵品の中から新たな標本を探し出すことが必要である。

S3 日本海のコククジラ回遊ルート

南部久男(富山市科学文化センター)

Migration route of Sea of Japan side of gray whale, *Eschrichtius robustus*.

Hisao Nambu (Toyama Science Museum)

コククジラは、北太平洋にアメリカ系個体群とアジア系個体群が知られ、北大西洋の個体群は 18 世紀に絶滅したとされる。アメリカ系個体群は、メキシコからベーリング海、チュコト海等の間の沿岸を回遊し、一時は捕鯨のため減少したが、現在は回復し 23,000 頭が生息する。一方、アジア系個体群は、主に朝鮮半島東部の日本海での捕鯨のため、一時は絶滅したと考えられていたが、サハリン東部沖で発見され、その生息数は 100 頭程度と考えられている(Weller et al., 1999, 2002)。この海域は、コククジラの夏の摂餌場所であるが、石油と天然ガス開発のため、生息に与える影響が危惧されている。このようにアジア系個体群は世界の鯨類の中でも危機的な状況にあるクジラと考えられ、2002 年には韓国のウルサンで IWC によるコククジラのワークショップが関係国の研究者等により開催されている(IWC, 2003)。

アジア系個体群は、中国の海南島から、朝鮮半島、日本、シベリア沿岸、サハリン島北東岸、カムチャッカ半島南西岸まで分布し、沿岸性が強く浅海で生活する。冬期に亜熱帯で出産し、春に北上回遊を開始し 5-10 月に寒帯の浅海で索餌し、11 月には南下回遊すると考えられている(大隅, 1998)。アジア系コククジラの回遊ルートには従来 2 つのルートが知られていた。一つは、ロシア沿海州から朝鮮半島、中国南部にかけてのルートで、もう一つは、北海道から本州の太平洋側のルートである(Mizue, 1951; Nishiwaki and Kasuya, 1970; Omura, 1974, 1984; 大隅, 1998; Park, 2001; Kato and Kasuya, 2002)。コククジラは、日本では江戸時代から明治初期にかけ、太平洋側の和歌山県、高知県、日本海側の山口県、北九州(長崎県、佐賀県、福岡県)沖で捕獲されていた。日本海では、1890~1960 年代に、主に朝鮮半島東部の日本海沿岸で 1500 頭ほどが捕獲され、日本列島側での捕獲記録は、山口県と北海道の捕獲記録があるに過ぎなかった。北陸地方沿岸では、明治初期の文献に小鯨(コククジラの江戸時代・明治時代の名称の一つ)が出現することが記載され、このことより Park(2001)は、日本海側の回遊ルートの存在を示唆している。大村(1984)は、日本海の日本列島側の回遊ルートについては、江戸時代に捕鯨が行われていた伊根湾(京都府)で、コククジラが捕獲されていないことから否定的であった。このように、近年までコククジラの日本海側の回遊ルートを証明する確実な生息記録は知られていなかった。

しかしながら、2003 年に漁業関係者の協力による富山湾の鯨類の生息記録調査で、富山湾西部(富山県側)でコククジラの生息記録を確認し、昨年の本研究会で発表した(南部, 山田, 石川, 2003)。1 例は、1955 年 3 月 16 日に定置網に入網した 1 個体で、2 例目は、1970 年 4 月に定置網に入網した 1 個体である。ともに沿岸に設置された定置網に入網していた個体で、アジア系統群のコククジラが日本海の日本列島側にも回遊していたことが証明されたのである。

近年のストランディング・目撃記録は少なく、大陸側の最後の記録は、韓国では 1977 年、ロシア沿海州では 1989 年、中国沿岸では 1996 年である。日本列島沿岸での確認記録は 1959~2003 年にかけ 14 例の確認記録があり(富山湾の 2 例含む)、近年では 2003 年に静岡県沖で目撃されている。14 例の内、太平洋側は 10 例で、日本海側では、富山湾以外では、北海道寿都の死亡漂着個体(1996 年)、新潟県の頭骨(1997 年)の 2 例 2 個体の記録があるに過ぎない。このような事実から、アジア系コククジラは日本列島周辺に近年も回遊していると考えられるが、その個体数は少なく、その中でも日本海側の回遊個体数は太平洋側に比べるとはるかに少ないと思われる。